

1．日時：平成16年12月8日（水）13：00～14：30

2．場所：立教大学池袋キャンパス・12号館第2会議室

3．メンバー

・出席10名

小生方麻里（麗澤大学）、片岡真裕子（東京農業大学）、川越智之（駒澤大学）、
楠山直文（成城大学）、助川敦子（文化女子大学）、関全葵（東京家政学院大学）、
高田涼子（国立音楽大学）、土屋貴之（法政大学）、森田敦子（東京国際大学）、
新見敏子（中央大学）

・欠席1名

木村友紀（法政大学）

4．討議内容（要約）

- ・ 危機管理マニュアルの作成にあたり、どのようなマニュアルを作りたいのかを、作成するか否かも含めて基本から見つめ直し、再検討した。
- ・ それぞれの意見を次に列挙する。
- ・ 危機管理関連の論文程度にとどめることも考えられるが、やはりマニュアルを作成したい。
- ・ マニュアルはあくまで1つのツールであり最終的なものではない。作成したマニュアル通りに実践して見直すというサイクルを研究したい。
- ・ 日本図書館協会が発行した『こんなときどうするの？ 作成マニュアル - 利用者と職員のための図書館の危機安全管理 - 』（以下、『こんなときどうするの？』）の2番煎じになるのではないか？
- ・ 『こんなときどうするの？』は網羅的な項目が多く、また内容も公共図書館向けのものも多いので、大学図書館特有の事例をピックアップし、特定の項目をより深く研究してみてもどうか？
- ・ 『こんなときどうするの？』では「人対人」「物」「人（単独）」に区分されているが、それ以外の面、例えば「コスト面」などからも考えられるのではないか？（予算に関しては図書館のみでは対応できない問題かもしれないが）
- ・ データに関しては、2005年4月から個人情報保護法が全面施行されるので、研究するには旬のテーマだと考える。
- ・ 日常業務の中で一番多く発生する危機は「強度小、頻度大」のものだが、おそらくそれに対するマニュアルは各館で作成しているはずなので、逆の発想に切り替えて「強度大、頻度大」の危機を想定したマニュアル作りも面白いのではないか？
- ・ アウトソーシングが進行していく中、専任職員がいない時間帯の危機対策についても想定する必要がある。

- ・ 実際いずれかの図書館で「危機を起こす実験」を行い、複数のパターンの検証結果を追究してみたい。
- ・ 今年の 11 月に起こった新潟中越地震による図書館の被害などを調査することも参考になるのでは？
- ・ 一般職（現場）と管理職ではリスクの認識が異なる場合があり、また個人差も影響すると考えられる。危機レベルや対象者による危機管理の重要性の定義づけは、いずれどこかの段階で明示する必要があるが、まずはブレインストーミングしてから重要性を見出した方がよい。
- ・ “現代の図書館 2002 年 vol.40 No.2 pp.61” の「部門別リスク一覧」の図を参考に考えてみてはどうか？

・ 今後の討議の進め方

- ・ まずは、各館で起こった（起こり得る）事例を考えつく限り挙げ、上記の「部門別リスク一覧」に当てはめてみて、大学図書館員の間で解決可能なものを研究し蓄積していく。
- ・ 次回は、挙げられた事例をホワイトボードに書き出し、全員で検討するプロセスをとる。
- ・ 事例の収集方法は、とりあえず「モノ」グループ参加者内にとどめるが、今後はパブリック・サービス研究分科会のメンバーなどにもアンケートをとるかもしれない。

5 . 決定事項

- ・ 次回までに、各館の事例を考えてくる。
(必ずしも書き出してくる必要はないが、討議を行う際に発言できるよう準備しておく。)
- ・ 危機管理の共通認識および概念は、継続的に深めていくこととする。

6 . 確認事項

- ・ 2005 年 12 月の研究分科会報告大会に向けてのスケジュール確認。
- ・ 木村（法政大学）がしばらくの間欠席。

以上